

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 30

編集者	1995.1.16
発行者	佐賀県立九州陶磁文化館
代表者	山田 陸 三
	〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
	電話 0955-43-3681
印刷所	山口印刷株式会社
	佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5



いろえ ざくろ ぼたんもん わがたすいぢゅう
色絵柘榴牡丹文輪形水注 館蔵資料

有田皿山

18世紀前半

口径23.0×10.9cm 高さ25.9cm 底径15.0×9.3cm

変わった器形の輪形の水注である。木の幹や枝を模した本体に柘榴、牡丹、鳥などを貼りつける。下の幹や輪形になった枝の部分は中空になって、水や酒を入れ、注器として用いられたものと考えられる。皿や碗などの食器が多い有田皿山の製品のなかであって、珍しい器形といえる。輸出向け製品であった可能性も考えられる。

平成6年度特別企画

「よみがえる江戸の華」展

—くらしの中のやきもの—

「よみがえる江戸の華—くらしのなかのやきもの—」展は平成6年10月7日から11月13日まで第1・第2・第3展示室において開催されました。

現代の基本的な生活様式や物質文化の基盤が江戸時代と深い関わりをもつことはよく言われることです。そうした江戸時代の生活文化の諸相は、日本文化研究にはかりしれない示唆を与えてくれるものである。

陶磁器の面では、中世においては必ずしも豊富とはいえなかったが、江戸時代に入ると多くの焼物が作られるようになり、さらに江戸時代後期にはあらゆる階層の人々の生活の中にまで浸透し、今日に至る陶磁文化の基礎を成した。しかし、生活基盤の発達、またそれにとまなう生活様式の変化によって、現代では姿を消してしまったやきものも少なくない。

本展では、江戸時代の生活の中の陶磁器を通して、豊かに育んできた人々の生活史の諸相を紹介することを目的とするものである。

全体を、Ⅰ．日々のくらし、Ⅱ．くらしの彩、Ⅲ．くらしの楽しみ、Ⅳ．くらしといのり、の4つの部門に分け、展示を行った。

Ⅰ．日々のくらしでは皿や碗などの食器や酒器、釜や土瓶などの食の道具が多数展示され、また現在ではほとんど目につかなくなった灯火具、暖房具といった住まいの道具にも注目が集まった。Ⅱ．くらしの彩では化粧の道具として鏡や蒔絵の鏡掛け、紅皿、お歯黒壺など、さらに装いの道具として印籠や根付などが展示され、主に女性の強い興味を引いた。Ⅲ．くらしの楽しみでは、なんといっても磁製の将棋盤・駒が一番の注目度で、香炉や香合といった玩香道具、また喫茶の道具として茶碗や水指、煎茶道具などに関心が集まり、喫煙の道具としてきせるや火入、たばこ盆など、さらに文房具として筆や硯、硯屏などが展示された。Ⅳ．くらしといのりではほとけの道具として仏花器や仏飯器、神の道具として御神酒徳利などが展示された。

展覧会では展示作品を単体としてではなく、できるときに組み合わせとして展示した。また参考資料として、江戸時代の文献や浮世絵などから生活の場面や道具の図などを写真パネルにして数多く展示し、各項目の解説パネルもできるだけ併置して展示し、多角的に理解できるように心がけた。

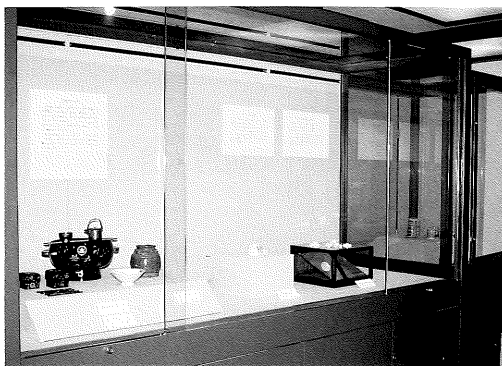
会期中、13,493名の観覧者があり、好評のうちに無事終了した。



開会式のテープカット



担当学芸員による展示解説



展示風景

「よみがえる江戸の華」展シンポジウム

「江戸時代のくらしと
やきもの」

平成6年10月23日に「よみがえる江戸の華」展の一環として、「江戸時代のくらしとやきもの」をテーマにシンポジウムを開催しました。

まずパネラーの野口和子先生（佐賀女子短期大学）に「江戸時代の料理」、飯野貞雄先生（国立科学博物館）に「江戸時代のあかり」、高橋雅夫先生（戸板女子短期大学）に「江戸時代の化粧」、谷田有史先生（たばこと塩の博物館）に「江戸時代のたばこ」のテーマで発表をしていただき、つづいてコーディネーターの大橋康二（九州陶磁文化館）の進行で、「江戸時代のくらしとやきもの」のテーマにもとづき、各々の分野において、陶磁器が使われはじめた歴史的な背景、またそれ以前の状況、現在との比較などについてパネル・ディスカッションを行いました。



シンポジウム風景



シンポジウム講師の先生方

行事・展覧会報告

博物館実習

平成6年度の学芸員実習は7月25日から8月12日まで行われました。受講生は佐賀大学の太宅睦子さん、杉町真由美さん、筒井美保さん、野田香織さん、九州産業大学の野田晃代さん、前田直美さん、山口芸術短期大学の中尾千寿さん、女子美術大学の田辺亜紀子さん、東京学芸大学の藤山友紀さんの9名でした。7月25日の開講式のあと、陶磁概論や陶磁資料取扱実習などに精力的に取り組み、陶片整理では注記や接合に苦労していましたが、全員、無事に3週間の実習を終了しました。



職員との懇談会

第25期・第26期陶芸教室

第25期陶芸教室（平成6年5月28日～7月30日・講師は橋口誠先生）、第26期陶芸教室（8月20日～10月22日・講師は大宅利秋先生）が開講されました。

講師の先生の指導により、手びねりやひもづくり、ロクロ成形、釉掛け、窯詰めと一連のカリキュラムをこなし、なかには大きな壺や花瓶を作った人もいて、皆さん焼物作りを楽しみました。

受講者は第25期、第26期とも20名ですが、応募者が合計57名あり例年より競争倍率が高く、抽選でもれた方は残念でした。



第25期の皆さん



第26期の皆さん

佐賀県陶芸協会展

平成6年11月29日から12月4日まで、第1展示室において、佐賀県陶芸協会展が開催されました。佐賀県陶芸協会展は毎年、佐賀市や東京などで行われていますが、平成2年からは九州陶磁文化館でも開催されるようになり、今回で第4回展になります。会長の今泉



展示風景

今右衛門をはじめ、酒井田柿右衛門や青木龍山、中里太郎右衛門、中里重利といった佐賀県を代表する陶芸家54名の代表作54点と小品40点が一堂に展示されました。今回は石橋国男、西山勇、福島清海、松本幹次郎の4名の新会員が加わり、発足当初の21名からすると2倍以上になり、しかも会員のほとんどが日本工芸会正会員や日展作家でその充実ぶりがうかがわれます。なかにはオブジェ風の作品もあり、伝統を継承しながらも新たな創作へ向けての試みを見ることができ、会場を訪れた方々の強い興味を引きました。

金武自然香墨作品展

平成6年12月6日から11日まで、第1展示室において、金武自然香墨作品展が開催されました。金武自然氏（明治45年生、本名一二）は、日本画家としてまた磁器の絵付師として現在も活躍していますが、今回、水墨画の指導書を出版したのにもない、山水を中心とした掛幅や屏風、絵付した磁製大壺や茶具、茶碗、陶板など47点の作品が展示されました。

金武氏は日本画家水上泰生、有田の北川伊平に師事し、山水画を学びました。深川製磁などに勤務して、磁器の絵付をするかたわら、佐賀県美術展、佐賀美術協会展などに出品し、創作活動を続けてきました。昭和62年には現代の名工として労働大臣賞を受賞しています。また、現在でも有田町の文化講座で山水画を指導しています。

自然描写にもとづく雄渾な筆致の山水に見る人の関心が集まっていました。



展示風景

シリーズ

やきものにみる文様 (27)

き ぎゅうふえ ふきどう じ
 騎牛笛吹童子文様

牛の背に乗り笛を吹く牧童は、画の意匠として中国では既に宋時代にはみられる。宋時代の廓庵禪師によって始められたといわれる禪の画題である『十牛図』は、人が悟りに至る十段階を、詩と短文によって解説するものである。このうちの第6番目の段階をあらわす画として、自分自身を馴らし、操ることができるまでに精神的に成長した姿である“牛に乗り笛を吹く牧童”「騎牛帰家」が描かれる。一方で、騎牛笛吹童子の図像は、山水画、とりわけ農耕図の中の点景としても描かれ、また、独立した画題としても描かれるが、この場合は『十牛図』における「騎牛帰家」のような精神的な内容は失われているようである。やきものの文様としては、牛の意匠は古染付にしばしば登場する文様であるが、「騎牛笛吹童子文」は典型的な文様とはいえない。江戸時代に画の手引き書として流布した中国の画譜では、『芥子園画伝』に「花間笛吹牧童過」という題で、また、『八種画譜』に唐時代の詩人、崔道融による五言絶句「牧豎^{ぼくじ}」の情景として「騎牛笛吹童子」が登場する。図の初期伊万里の文様は、「牧豎」に歌われているように、簞笠をもち、牛の背に臥せていること、また、画譜につきものである“倣筆意”の銘が記されていることから、『八種画譜』をもとにして文様を描いた可能性が高い。これと同一文の陶片が天神森窯で出土している。(永渕友子)



染付騎牛笛吹童子文皿

有田 17世紀前半 個人蔵

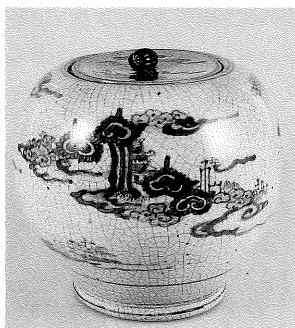
シリーズ

やきものの技法 (27)

やき
 ひび焼

釉薬と素地の収縮の差を利用して釉薬に意図的にひびを生じさせ、文様としての装飾性を持たせたやきものの。青磁や陶胎染付の作品に特徴的なひび焼がある。陶胎染付は、陶器質の素地に直接染付を行う場合と、素地の上に白化粧を施し、その上から染付を行うものがある。後者の白化粧を行う場合がひびが生じやすく、ひびの装飾的な効果を出しやすい。ひび焼は伝世するうちにひびの中にしみが入り、黒い文様となって器の全面を飾る。

素地と釉薬が合わずに、結果的に釉薬にひびが入ったのはひび焼とは呼べない。伝世品の中では最初から意図的にひび焼を作ったものと、結果的に釉薬にひびが入ったものが混同されている。たとえば肥前の17世紀前半の窯として知られる百間窯(佐賀県杵島郡山内町)の製品は、素地が炝器質に近いため釉薬に貫入が入りやすい。しかしこれは意図してひびを生じさせたものでない。一方17世紀後半の長吉谷窯(有田町)の製品は、ほとんどが上質の磁器の素地であるが、陶胎に化粧土をした陶胎染付の製品が稀にある。磁器生産



染付如意雲文水指

有田 17世紀後半

館蔵

専門の窯であえて陶器を焼くのは特別の需要に応じた製品と考えられる。磁器の冷たい雰囲気とは異なる、柔らかな印象を与える陶胎染付によるひび焼は、茶碗、水指、香炉など茶陶が多い。「寛文仁年(1662)」「大樽山(有田町)」の銘が入ったひび焼の染付如意雲文香炉があり、写真の水指も同時代の有田の作品と考えられる。かつては平戸藩の中野焼と見なされていたものであるが、中野窯の出土陶片には化粧土のものではなく、認識を改める必要がある。(鈴木由紀夫)

〈概 報〉

北波多村帆柱窯跡の調査

当館では、平成6年度の肥前地区古窯跡調査として、佐賀県東松浦郡北波多村大字稗田字帆柱に所在する県史跡帆柱窯跡の発掘調査を、平成6年7月18日～27日にかけて実施した。

帆柱窯跡は岸岳城の西へと伸びる丘陵の裾にあり、飯洞甕上窯、飯洞甕下窯、皿屋窯、道納屋窯などとともに岸岳系唐津窯と呼ばれてきた。肥前陶器の歴史でもっとも古い窯といわれるグループであるが、飯洞甕下窯以外はよくわかっていなかった。

調査の結果、窯本体は南東から北西に山の斜面をのぼり、勾配約21度の登窯である。なかほどの焼成室2室分を検出したが、1室の規模は幅約2.1m、奥行約2.15mであり、奥壁の段差は約15cmと低い。温座の巢の柱数は6本と少なく、柱は普通粘土をレンガ状にかためたものを据えるのに対し、大きな粘土塊を芯にして粘土で巻いて作る。製品を窯詰めして焼く砂床面の勾配は15度と急である。火床幅は25cm程であり、火床境は高さが約20cmと高いのが特徴である。

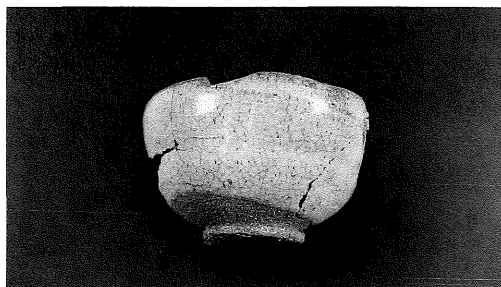
製品の品種は碗・皿・小坏・片口鉢・瓶・深鉢・スリ鉢などがある。碗は藁灰釉をほどこしたものと、その口縁部に鉄釉を塗ったいわゆる皮鯨手のものがある。皿も同様の2種類が主であるが、ほかに不透明な灰釉をほどこし、茶色の粘土分の多い砂目を置いて重ね焼きしたものがある。小坏・片口鉢も藁灰釉をかけ、鉢には皮鯨手もある。瓶は藁灰釉と鉄釉があり、主に叩き成形による。底部に貝目がみられるものもある。叩き成形による深鉢やスリ鉢には飴色の鉄釉が外面にかけられている。窯道具はハマとトチンがある。

唐津焼草創期の窯と推測された帆柱窯も焼成空間に小さいながらも段差をもつことがわかった。藁灰釉と鉄釉を主に用い胎土目はみられない。のちの砂目と異なる砂目がわずかにみられること、スリ鉢の筋目はヘラで刻み、のちの櫛状工具で入れる筋目と違うことなど伊万里・武雄方面に広がる胎土目積みの初期唐津窯とは異なる。唐津草創期の窯業技術の一端を示す資料として重要といえる。

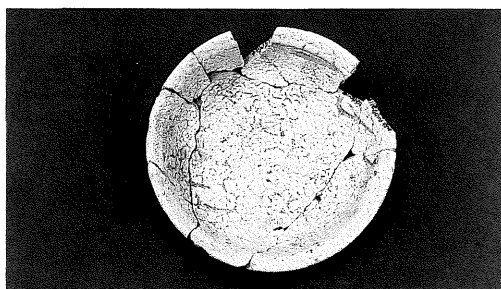
(大橋康二)



帆柱窯の焼成室



藁灰釉碗



藁灰釉皿（焼成不良）



藁灰釉波縁皿（皮鯨手）

利 用 案 内

- | | |
|-----|--|
| 開 館 | 午前9時～午後4時30分 月曜休館
年末年始(12月28日～1月4日)休館 |
| 観覧料 | 一般200円(150円)／大学生150円(100円)
小・中・高校生は無料。
()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。 |
| 交 通 | 佐世保線有田駅下車徒歩10分 |